

大黒島のコシジロウミツバメ繁殖状況調査

庄子 晶子

筑波大学生命環境系

はじめに

厚岸町の大黒島は、コシジロウミツバメ *Oceanodroma leucorhoa*、ウトウ *Cerorhinca monocerata*、オオセグロカモメ *Larus schistisagus*、ウミネコ *Larus crassirostris*、ウミウ *Phalacrocorax capillatus* といった海鳥が生息する世界的にも貴重な海鳥集団繁殖地である。しかし、近年の調査により、大黒島におけるコシジロウミツバメの巣穴数（2014年：42万巣）が、1970年代（170万巣）および1980-90年代（70-85万巣）と比べて大きく減少していることが明らかとなった（大門ほか 2019）。この急減の要因はまだわかっておらず、繁殖状況等を含め情報を収集していく必要がある。

本研究の目的

本研究では、コシジロウミツバメの繁殖状況および繁殖地の現状を把握することを目的として、1) 育雛期のコシジロウミツバメの雛の栄養状態（繁殖成績の指標）、2) 植生別の巣穴密度および巣穴利用率を調べ、過去との比較を行った。

結果と考察

結果を表1に示す。2019年の大黒島において、成長途中の雛の栄養状態は、繁殖成績がよかった1982年と変わらなかった。しかし、育雛期の巣穴利用率の低さから、2019年は繁殖に参加するつがいが多かった可能性や、育雛期に至るまでに繁殖に失敗したつがいが多いといった可能性が示唆された。このような繁殖状況が毎年続いていた場合、毎年の個体群への加入数は少なく、個体群が減少していてもおかしくない。今後は、2019年の繁殖状況が、他の年でも同様なのかを含め、より詳細なモニタリングを行っていく必要がある。また、巣穴密度については、イワノガリヤス区で高いという、過去とは異なる傾向が確認された。今後、植生区以外のハビタットの影響も考慮して、巣穴密度の変動を調べることで、より正確な巣穴数（繁殖つがい数）の推定ができるだろう。

表1. 全4プロットの巣穴数、巣穴密度、雛（もしくは親）がいた巣穴数、植生区ごとの巣穴利用率を示す。

植生区	プロット 面積 (m ²)	プロット内 全巣穴数	巣穴密度 (巣穴数 / m ²)	雛あり 巣穴数	親あり 巣穴数	雛・親あり 巣穴数	巣穴利用率 (%)
イワノガリヤス	20	51	2.55	3	0	0	5.9
<i>Calamagrostis langsdorffii</i>	20	68	3.40	27	0	1	41.2
エゾヨモギ	20	35	1.75	9	0	0	25.7
<i>Artemisia montana</i>	20	36	1.80	9	1	0	27.8